もういいかなと思って、と言って今はそのまま短パンを脱ぎ去ってからスカートを履くので、
それを少しだけ残念に思う
もっとフツウな苗字になりたいからちゃんとケッコンしたいと思ってるんだ、と言うので
まったくのひとごとのようにフウン、と返す
ミヤザキさんは二歳年上のいそがしい社会人のひとと交際しているようなので
日曜日の夜だけはグリーンハイツ・井田、三階角部屋には誰もいない
ミヤザキさんは長女で、一年前におかあさんと喧嘩し続けてしまい
家出をしてきたそうなので学費も家賃もぜんぶひとりで払う羽目になったそうなので
レトルトの中華丼をパックご飯にかけて食べながら、おいしくなーい、とよく言っている
ご機嫌な時はコンビニのカット野菜をパリパリ皿うどんの上に乗せておいしい、と食べている
冷蔵庫はだいたい空っぽで
たまに人からもらったらしい日本酒の瓶が横たわっている
繁枡と書かれたラベルは父親が飲んでいたものそのものであまりに見覚えのある
それほど暑くない夜はそれをコンビニのロックアイスのカップに注ぎながら
河川敷で飲んでいる
ミヤザキさんは強く生きているけれど飲みすぎるとほろほろ泣き上戸になり
扶養の壁なんてとうに越えているのに子どもみたいにもなる
ゴミ出しは行かないといけないので曜日もきちんと守る人なので
ラベルを剥がされたペットボトルがキッチンの背中に整列することになり、
それをなんだかかわいく思うぼくは
ミヤザキさんがゴミ出しに行く気配を感じて、薄っぺらい灰色の布団の中でもう一度目を瞑る